

特集

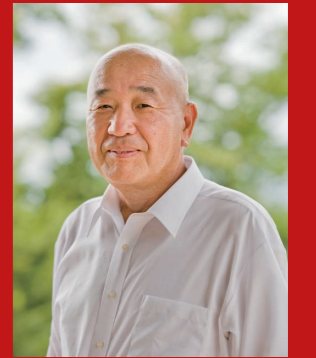
祭りの未来

コロナ禍による3年間の中止を経て、今年、市内各地で地域の祭りが復活しました。祭りに関わる人々の思いから、地域の祭りの未来について考えます。

1. 大安町南金井「天王祭」7月22日(土) 2.3.4.5.11. 北勢町阿下喜「八幡祭」7月29日(土) 6.7. 大安町平塚・石樽下「水神祭」8月19日(土) 8.9. 員弁町北金井「盆山車曳き」8月16日(水) 10. 員弁町畑新田「畑新田八幡社山車曳き祭」8月13日(日) 12. 員弁町石仏「中元祭盆山曳行」8月16日(水) 13. 員弁町楚原・御園「合祀祭(天白祭)」8月6日(日)

八幡祭

祭りを未来へつなぐ



大字阿下喜自治会長
近藤 勝司さん

祭りは地域力を育む

阿下喜には、多くの有志団体があります。活動内容は違えど、「阿下喜のために活動したい」という志は同じです。活動している人たちは、「八幡祭があるからこそ、地域に愛着が生まれて、地域のために何かしたいという気持ちになった」と話しています。阿下喜では、祭りが地域の力を育てている姿が見られません。地域の将来のためにも、八幡祭を次世代につなげていきたいです。

「あばれみこし」で有名な北勢町阿下喜の八幡祭。近年、みこしの担ぎ手不足の課題を抱えていました。そんな中、コロナ禍でみこし渡御を3年間中止し、伝統継承の難しさにも直面。課題に向き合い、模索しながら、祭りを未来へ残そうと奮闘する地域の人々の姿がありました。

1. 自治会長から子どもみこしを担ぐ中学生へ「伝統の中で楽しんで！」とエールを送る 2. 過去の映像を見ながら流れを確認 3. 初めてみこしを担ぐ中学生の事前練習 4. 気付いたことを伝える 5.6. 声をかけ合いながら、初めての2区合同の準備を進める 7. 小学生を対象にした祭りの体験日を設けた 8. 実際にたたいて、太鼓の楽しさを発見。「もっとたたきたい！」



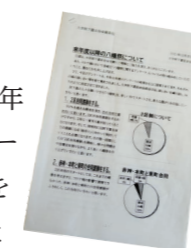
今年の阿下喜の自治会長たち

八幡祭をどう存続させていくべきか アンケートを取り、みんなで考えた

市の指定無形民俗文化財である八幡祭。「サンヨ！サンヨ！」の掛け声で阿下喜地内を練り歩く大人みこしには、200人ほどの担ぎ手が必要です。阿下喜の4つの区が毎年順番にみこしの担当を持ち回っていましたが、数年前から担ぎ手を集めるのに苦労する区が出てきました。

「このままでは継続できない」
「祭りのやり方を見直そう」

自治会長会を中心に議論を重ね、2019年と2021年に阿下喜の住民を対象にアンケートを実施。アンケートで寄せられた意見を受けて、今年は2区合同でみこしを担ぐという新しい形で開催されました。



▲住民へ配られたアンケート結果

試行錯誤して、祭りを継承していく

コロナ禍の3年間、中学生が担ぐ子どもみこしも中止していたため、今年は全員が未経験者で臨むことに。その状況を見て、有志団体の阿下喜祭好会が中学生への指導役を買って出ました。本町自治会長の出口省吾さんは「幼少期に、祭りの楽しさを経験した人たちが成長して、子どもたちに楽しさを伝え

ようと動いてくれた。この動きは、祭りを持続可能なものにしてくれる」と話し、「子どもに楽しい思い出を作ること」が継承の鍵だと教えてくれました。

見る人を楽しませてきた仮装パレードは、今年初めて一般公募を実施。多くの人に参加してもらおう形を模索しながら、検証を繰り返して、次世代へ継承していく方法を阿下喜全体で探っています。



だから私は、祭りが好き

市内の各地域には、世代を越えて受け継がれてきた祭りがあります。祭りが好きな人たちに、祭りの魅力を聞きました。

大安町南金井

天王祭

人とのつながり



鈴木 祥平さん 藤本 明都さん

鈴木さん 祭りのお囃子はやしを聞くと「夏が来た！」と感じます。交流の場がなくなりつつあるので、いろんな人と交流できる祭りは、とても大切。コミュニケーションを取りながら、次の世代にも伝えていきたいです。

藤本さん 夏になると、みんなで太鼓をたたいた思い出がよみがえります。進学や就職で地元を離れてしまう人が多いけれど、祭りが地元で集まる機会になっています。祭りがあることによって、先輩や後輩に相談できるなど、地域の人とつながりを築けています。

北勢町阿下喜

八幡祭

みんなとを感じる達成感



山下 愛翔さん

4年ぶりの開催で、不安はありましたが、「中止していた期間の分も盛り上げるぞ」という強い気持ちで、子どもみこしを担ぎました。実際に担いでみると、すごく重たくて、祭りの終盤は体力的に大変でした。中学1年生から3年生まで、学年を超えて声をかけ合い、最後までやり遂げたときは、「みんなと乗り越えた」という達成感がありました。この祭りを通して、自分自身、他の学年にアドバイスなどを伝える力が付いたと思います。参加できたことに、すごく誇りを感じました。

員弁町楚原・御園

令祀祭ごうし
(天白祭)

家族の絆きずなを感じる



橋本 早紀さん

「お祭り大好き」な祭り一家で育ったので、子どものころから祭りは身近なものでした。2人の兄が青年団に入ったのを見て、私も高校生の時に当たり前のように加入し、祭りに関わるように。父と兄たちと参加した今年の祭りでは、父に手を取ってもらい太鼓をたたいた幼いころの記憶がよみがえり、家族の絆を感じる瞬間になりました。今は、県外の大学に通っているのでも地元を離れていますが、祭りが家族の集まるきっかけになっています。この祭りが長く続いてほしいです。

藤原町坂本

坂本曳山車行事ひきやま

いろんな世代との交流



鳥山 たづ子さん

長年、祭りの食事担当をしてきました。祭りの参加者や見に来た人に、地区の集会所におにぎりや豚汁を提供していたので、気付いたら、いつも祭りは終わっていました。でも、「おいしい！」と言って食べてくれる姿を見ると、準備は大変だけど、「やってよかったなあ」と思います。祭りが終わると、一緒に準備をしてきた人たちと共に達成感を味わえるのもいいところですね。地域の人との交流も減ってきている中で、祭りの準備を通していろんな世代と関われるのは、うれしいです。

地域の祭りの「これから」

これからの祭りはどうあるべきか——。コロナ禍の間、祭りのあり方を見つめ直した地域も多くありました。祭りに関わる人に、祭りの「これから」を聞きました。

大安町大井田 大井田弁天祭



左から保存会の後藤彰彦さん、鈴木さん、柴田隆秀さん

▶▶いなべ10 9月24日(日)～30日(土) 放送

みんなが参加できる祭りに

大井田弁天祭保存会 祭事実行委員長
鈴木 信さん

みんなが楽しめる祭りでないと、祭りは衰退します。衰退しないために、時代に応じて、祭りも変えていかないとはいけません。SNSで情報発信をしたり、誰でも保存会に入れるように変更したりしてきました。むやみに変えるのではなく、地区の住民にも納得してもらって進めることが大事。「みんなが参加できるように」と考えながら、伝統の大井田弁天祭を次世代に継承していきたいです。

員弁町北金井 金山車曳き



日紫喜さん、準備委員会のメンバーとの集合写真

▶▶いなべ10 9月17日(日)～23日(土) 放送

みんなで協力して作る

北金井自治会長 日紫喜 淳さん

青年団の解消などもあり、数年前から山車曳きは行われていませんでした。希薄になった地域の交流を深めるため、6年ぶりに開催することに。開催にあたり、準備委員会を発足。約30人が集まり、役割分担をして準備を進めました。祭りの準備を通して、いろいろな人と関わり、一つの行事をする楽しさを体験してもらえたのでは。その体験が、将来の地域で活動するとき生きてくると思います。

未来のために記録する

現在、市内では、夏と秋に多くの山車曳き行事が見られます。員弁町や大安町の山車には、桑名石取祭の祭車の系統が多くあり、花飾りを付けるなどして、いなべ市独特の山車文化が見られます。

藤原町坂本の山車は、明治15年に滋賀県長浜市の職人によって作られたものです。当時、滋賀県

と交流があったことを知る貴重な文化財として、市の指定有形民俗文化財に指定されています。

こうした地域で受け継がれてきた文化を、未来へつなげるために「記録する」ことは大切です。過去を未来につなぐ、重要な作業です。

▶藤井さんが編さんした冊子「坂本と曳山車」。北勢図書館所蔵



みんなと息を合わせてみこしを担ぐ、かねを鳴らす、笛を吹く——。祭りでは、みんなで一つのことをやりきる体験をします。

祭りは人と人のつながりを作り、人と人のつながりの中で、地域への愛着が育まれていきます。

現在、地域で活動をしている人たちの「祭りがあるからこそ、地域に愛着が生まれて、地域のために何かしたいという気持ちになった」という言葉から、祭りの持つ力を感じることができます。

自分たちの地域の未来のために、祭りが大きな力を発揮してくれるのではないのでしょうか。数年ぶりの祭りを楽しむ人々の姿から、明るい未来が感じられました。